

気仙沼にアコーディオンを！ (前編)

勝俣 静雄

気仙沼の託児施設「おひさま」を訪ねたのは、土曜日の午後3時過ぎで、子どもたちはお昼寝からちょうど起きたところであった。まず友子さんの紙芝居「おむすびころりん」で始まった。おじいさんが、おむすびを穴の中に落としてしまって、「おむすびころりん、すつとんとん」と歌われると、子どもたちはすっかりストーリーに引きこまれていった。アコーディオンの演奏は、子どもたちも知っている、「元気になれそう」（魔女の宅急便より）、「いつも何度でも」（千と千尋の神隠しの主題歌）とつづき、「森の熊さん」や「チューリップ」はみんなで楽しく歌った。子どもたちにとっては6台のアコーディオンの大合奏など初めての経験であろう。物めずらしくて演奏している人をのぞきにくる子もいてなんとも微笑ましかった。

「おひさまのみなさんに、プレゼントがあります」 後藤さんのやさしい呼びかけに、子どもたちは、いっせいに箱のまわりにかけて寄った。「高く掲げるから座って見てね。」といっても押しあいをしている。そのとき、「みんな座って！」と鋭い保育士さんの声、ようやく20



人ほどの子どもたちは座って箱をかこんだ。

まず取りだされたのは黒い四角なケース。いったい何が入っているのだろう。子どもたちは心を躍らせている。つぎにケースからとりだされた赤い小型のアコーディオン。全員目を輝かせ、驚きの表情である。さっき聞いた不思議な楽器を手にして、子どもたちは、みんなうれしくてはずんでいる。

昨年12月のVITAコンサートでの多くの方の温かい支援が、この赤いアコーディオンになって、ついに子どもたちのところに届いたのである。川口先生をはじめアコーディオン・アンサンブルAirや稲城アコーディオンサークルの人たちの、これまでの長い地道な努力が、ついにここに実を結んだのだ。その努力を思うと頭の下がる思いがした。そして東京から11時間かけて運んできた甲斐があったと思った。



プレハブ倉庫の20畳・30畳の2部屋を使った無認可託児施設「おひさま」に登録されている園児は、40人にも達している。しかし有資格の保育士はわずか3名で、1歳児から5歳児までを、朝7時から6時まで保育している。超いそがしくて、数名のボランティアに頼らざるを得ないのが実情であるという。ここの園児たちの親は、多くが仮設住宅に住んでいるという。きびしい生活の状況が想像され、そういう中で、「おひさま」の果たしている役割は非常に大きいものがある。三人のうちの1人の保育士さんが、学生時代にアコーディオンを演奏していたと聞き、ひとまず安心した。アコーディオンが「おひさま」で大活躍するのを想像するだけで、わがことのようにうれしくなった。（次号に続く）



✿ 先日は素晴らしい演奏会 ありがとうございます。
皆 元気で頑張っております。

